



町立病院 だより

問合せ ● 国保町立小鹿野中央病院 (小鹿野町小鹿野300番地)

☎75-2332 FAX75-3313

小鹿野中央病院

検索



ドクター内田のひとりごと いかに生きるか

思いつくまま 83
気のむくまま

3月になりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。長らく掲載させていただきました内田のひとりごと、今回で最終回です。83回も書いたなんて我ながら感心しています。本音を言うのと締め切りに追われもうやめたいと思ったこともありましたが、でもここまで続けることができたのは、皆様からの温かい反応があったからこそです。あらためて感謝いたします。

私がエッセイを通して伝えたかったことは、「いかに生きるか」ということです。人生にはうれしいこと、悲しいこと、楽しいこと、辛いこと、いろいろあります。病気になって真剣に自分の人生について考えたり、大切な人を失って失意のどん底に落とされる時もあるでしょう。それでも生きていかないといけない。そのヒントになるような話を、医療の現場を通して経験したことや医療に全く関係ないことと重ねて、私の主観で綴ってきました。

あちこちで話してきた私の講演でも同じです。「どうやって死にたい?」という質問から始まりますので、初めて聞かれた方はドキッとされるかもしれません。どうしてそういう話をするかという、日本に「死生学」を広め根付かせたアルフォンス・デーケン先生(上智大学名誉教授、1932~2020)の影響を受けています。デーケン先生はDeath Education(死の準備教育)という、自分に与えられた死までの時間をどう生きるかと考えるための教育を提唱されました。つまり、死との向き合い方を学ぶことで、人生の最期まで心豊かに生きることを呼びかけたのです。その教育はすべての人にとって必要であると思っています。現在厚労省が推し進めている人生会議も同じことなのかもしれません。

医学の進歩に伴い医療は病気を治すことが最優先とされ、死はむしろ「医療の敗北」と位置づけられました。若い方(今では70代も若い)が入院中に亡くなったなら何かあったのかと思われることもあります。しかし医療は不確実です。以前より格段に進歩したとはいえ治せる病気もあれば治せない病気もあり、むしろ

治せない病気のほうが多いのではとさえ思います。そういう意味では医師の仕事は治せる病気を見落とさないことです。今の若い先生方は本当に多くの病気を見つけ治しています。こと町立病院の先生方は本当に優秀です。まれな病気を診断し、適切に治療したり専門に紹介することで治った方を多く見てきました。そんな先生方と一緒に仕事ができただけは本当に幸せでした。私はどちらかという治せない病気の人に寄り添っていく役目でした…。

デーケン先生はユーモアも大切にしていました。そのキーワードが、「にもかかわらず」です。ドイツには「ユーモアとは『にもかかわらず笑う』ことである」という言葉があるそうです。ユーモアとは、ジョークやギャグではありません。「ユーモアとは愛と思いやりの現実的な表現」だそうです。苦しんでいるのにもかかわらず、相手に対する思いやりとしてのユーモア。私が淀川キリスト教病院研修中にお世話になった日本のホスピスの第一人者である柏木哲夫先生もいつも大事にしていました。

アメリカのことわざで「壊れた時計」というのがあります。針が止まっているその時計も、1日2回は正しく時間を指している、というのです。つらいことや意味がないと思われることの中に何か意味を見出すことが、生きていく力になるのかもしれませんがね。

振り返ってみると「内田のひとりごと」は偉そうなこともたくさん書いてきました。では私がこの通りに生きているかと言えば、ノーです。でもこうして文章を綴ることで、私の立ち振る舞いや心の持ちようを修正していきながら書いています。皆さんに書いてあるつもりで、実は自分自身に向けて書いているんだなあと思ったりもしていました。

これからも皆さんの人生、あなたらしく過ごすことができるよう心から祈念して終わりたいと思います。長い間ありがとうございました。

埼玉医科大学国際医療センター うちだ のぞむ 内田 望